

主 論 文

Subjective evaluation of a peer support program by women with breast cancer: a qualitative study

(乳がん患者が捉えた乳がんピアサポートプログラムの主観的評価：質的研究)

[緒言]

患者同士の支援であるピアサポートは、近年注目されており、ヘルスケア提供の場において、ピアの関わり合いを取り入れることは実践家や研究者にとって実質的で重要な概念であるといわれている。諸外国では、多様な疾患に様々な形でピア介入が試みられており、特に、がん疾患においてピアサポートは広く普及している。中でも乳がんに関する研究報告は多く、患者自身の経験の共有、治療の副作用の管理への提案、情緒面や QOL 向上など様々な効果が報告されている。一方、我が国においては、2012 年、がん対策推進基本計画の中で、がん患者・経験者との協働を進めピアサポートをさらに充実するよう努めることが掲げられ、近年ピアサポートに関連する取り組みが増えつつある。しかし、まだ緒についたばかりで、ゆえに研究報告も少ない状況である。このような状況の中、A 病院では、乳がん患者に対してピアサポートを活用したプログラムをスタートした。わが国において実施されているピアサポートプログラムを評価していくことは、今後、ピアサポートを推進してく上で意義あるものと考えられる。以上のことから、本研究では、A 病院における乳がんピアサポートプログラムに参加した乳がん患者が主観的に捉えたプログラムの評価について明らかにすることを目的とする。

[方法]

1. 乳がんピアサポートプログラムの概要：乳がん患者からピアサポートの依頼があると、プログラムのコーディネーターが、希望した乳がん患者にプログラムの詳細を説明し、ピアサポーターへの要望を確認する。コーディネーターは、要望に適したピアサポーターを選定し、面談の日時、場所を調整する。面談時、コーディネーターが患者とピアサポーターを引き合わせ、ピアサポーターは、乳がん患者に対してピアサポート提供を行う（1 時間程度）。面談終了後、コーディネーターは、乳がん患者およびピアサポーターに、別々に面談の様子を聞き、ピアサポーターは報告書を記載する。なお、ピアサポーターは、ピアサポーター養成研修（半日×3 日間）を修了している。
2. 研究協力者：プログラムを受けた 1 から 10 番目まで全ての乳がん患者である。
3. データ収集方法：研究協力に同意の得られた乳がん患者 10 名に対して、インタビューガイドを用い半構成的インタビューを行った。インタビュー中に語られた内容は研究協力者の許可を得て録音し逐語録に起こした。データ収集期間は 2011 年 5 月～2012 年 6 月であった。

4. 分析方法：許可を得て録音した面接内容の逐語録をデータとし、帰納的内容分析の手法（Ero & Kyngäs）を用い分析した。分析過程では、複数の研究者および乳がん看護の専門家間で繰り返し議論しコンセンサスを得るようにし、また、複数の研究協力者に分析結果を提示し確認を行った。さらに質的研究業績をもつ研究者に全行程を通してスーパービジョンを受け、分析の真実性（trustworthiness）の確保に努めた。
5. 倫理的配慮：岡山大学大学院保健学研究科看護学分野倫理委員会および岡山大学病院看護部倫理委員会の承認を得た。研究協力者には研究の主旨、研究参加の任意性と中断の自由、参加拒否による不利益の回避、個人情報への守秘、データ保管と破棄、本研究以外でのデータ不使用、研究結果の公表について文書面および口頭にて研究者が説明を行い、署名による研究参加の同意を得た。

[結果]

研究参加者 10 名は、30 歳代から 60 歳代、平均年齢 48.2 歳であった。3 名が化学療法前、7 名が手術前にピアサポートを希望しており、10 名全ての患者が治療前の段階であった。

分析により、97 のコードから、21 のサブカテゴリーと 9 のカテゴリーが抽出された。以下に、分析結果について、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを「 」にて示す。

まず、プログラムのメリットとして、次の 3 つのカテゴリーが抽出された。【ニードにあったピアサポートを個別に受けられる】では、研究参加者は「グループでのサポートでは圧倒される」や「予期しない情報に振り回されやすい」状態であることを語った。しかし、そのような傷つきやすい状態でも「同じ病気を体験している人に会いたい」と思い、気を使わなくてもよい「自分と関わりのないピアを求めている」ことがわかった。【研修を受けているピアサポーターは相談しやすい】では、研究参加者は「研修を受けているピアサポーターに安心」感を抱き、「ピアサポーターは医療者より相談しやすい」と感じていることが分かった。【優れたコーディネーター】では、ピアサポーター選定や面談の調整のスムーズさに対し「看護師のコーディネーターに感謝」の気持ちを示した。次に、受けたピアサポートのメリットとして 4 つのカテゴリーが挙げられた。【ピアならではの情緒的サポートを受けられる】では、同じ病気を抱えているから故に「共感しあえ」、ピアに出会うことにより一人じゃないと感じることにことで「孤独感から解放され」、同じ病気を抱えながらがんばっている姿を目の当たりすることで「安心でき」、そして「励まされる」というピアであるからこそ受けられるサポートを体験していた。【特定の経験的な情報を得られる】では、体験者からしか聞くことのできない「病気をどう乗り越えたかを聴ける」ことや、仕事ができているかどうか、夫婦生活はどうしているのか等、患者の聞きたい「特定の関心事をたずねる」ことができること、また、「実際の体験に触れることで実感がわく」というメリットが挙げられた。【自己を見つめ直す】では、ピアサポーターと話すことで、心と体の状態のずれに気づかされ「今の状況を冷静に受け止める」ことができたり、「ピアサポーターに自分を重ね合わせてイメージする」ことができ、自分を冷静に見つめなおすきっかけになることが語られた。【前へ進むための準備を整える】では、ピアサポーターの姿が自分

を「前に進む後押しをしてくれる」ように感じ、悩んでいたことに「決心がつき」、実際に「今後の段取りを考える」ことに結び付くことが分かった。一方、乳がん患者が捉えたデメリットとしては、「ピアサポーターと個人的なつながりが持てない」ことへの【個人情報管理の厳しさ】や自分と「より類似性の高い人を望む」ことによる【マッチングの限界】が明らかとなった。

[考察]

今回のピアサポート希望者は全て手術や化学療法という治療前の段階にあった。患者はこれから始まる治療について様々な不安や苦痛を感じており、病気に関するあらゆる情報に振り回されやすい時期にあるといえる。このような対象の場合、様々な疾病レベルの患者が多数集まる場への参加が、かえって混乱や不安を誘発する場合もあり、先輩患者とのギャップに圧倒されたり、患者会等へ参加するには元気が足りないと感じてしまうのではないかと考える。本プログラムでは、研修を受けたピアサポーターと直接会い患者のニーズに沿ったサポートを受けることができるため、安心して相談できる。このようなピアサポート提供システムでは、傷つきやすくマイナス情報に揺れ幅の大きい時期の患者に対しては特に適しているのではないかと考える。また、実際にピアから提供されるピアサポートは、医療者から専門的なサポートとは性質が異なる。ピアならではの情緒的サポートを受けることで、精神面が安定したり、病気との向き合い方や対処法など、体験者しか応えられない具体的な関心事をたずね、必要な情動的サポートを得ることで、患者が今の自分を見つめなおし、療養生活をイメージし、具体的に次の段取りを考えていけるようになる。このような効果が期待できるピアサポートは、患者が長期にわたり病気とうまくつきあう上で必要な力を与え、これから先にある治療や専門家からのサポートをも受け入れやすくすることにつながるのではないかと考える。患者が捉えたデメリットの情報管理に関しては、医療現場でのサポート提供であるためやむを得ないことである。患者はさみしいと感じることもあるだろうが、面談後再度ピアサポーターに会いたい場合は、再度コーディネーターが調整することで対応している。また、類似性の課題に関しては、今後ピアサポーターの人数を増やして、少しでも患者のニーズに近づくよう努力が必要と考える。

[結論]

A病院の乳がんピアサポートプログラムに参加した乳がん患者10名を対象に半構成的面接を行い、乳がん患者が主観的に捉えたプログラムの評価について質的帰納的に分析した。プログラムのメリットとして【ニーズにあったピアサポートを個別に受けられる】、【研修を受けているピアサポーターは相談しやすい】、【優れたコーディネーター】、ピアサポートのメリットとして、【ピアならではの情緒的サポートを受けられる】、【特定の経験的な情報を得られる】、【自己を見つめ直す】、【前へ進むための準備を整える】が挙げられた。デメリットとしては、【個人情報管理の厳しさ】、【マッチングの限界】が明らかとなった。本プログラムは、検討すべきいくつかの課題を抱えながらもプログラムを受けた乳がん患者に多くのメリットをもたらしていることが分かった。